



表紙のART

WEB



音楽祭をアートで演出、
巨大立体作品「英雄の業績」

この夏、山形では初の開催となった「アフィニス夏の音楽祭」。その会場周辺で芸工大の院生や美術科教員が大規模なアートプロジェクトを展開しました。メイン会場の文翔館の前庭に出現した巨大な立体アートは、日本画コースと彫刻コースが共同で創り上げたもの。今回の音楽祭のシンボルでもあるR.シュトラウスの交響詩「英雄の生涯」から英雄の輝かしい業績をイメージし、山形にゆかりの深い、銀色の果樹畑用反射シートで表現。起伏に富んだ立体アートは、広く街行く人々に英雄が歩んだ人生の紆余曲折を印象づけていました。

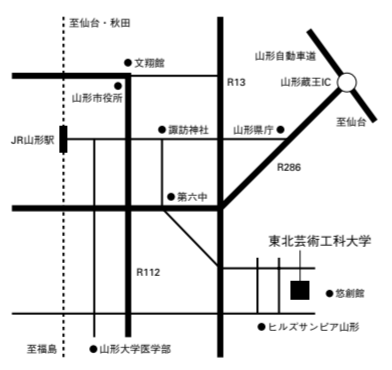
「g*g」とは？

芸工大広報誌のタイトルは「g*g」。最初の「g」は芸工大のgであり、もう一つの「g」は芸術市民のg。文化的志向を持つ皆さんを「芸術市民」と名付けました。あの絵が好き！ このデザインがすごい！ 景観がきれい！ こんな風に日常の中で感動できる人は立派な芸術市民。そんな芸術市民のみならず芸工大が、「+」より強い「*」で結ばれることで、新しい何かを創り上げていきたい、そんな思いを込めて「g*g」。親しみを込めて「ジー・ジー」と呼んでください。広報室では、「g*g」を置いてくれるショップやギャラリーなどを随時募集中です。

東北芸術工科大学

- ◎芸術学部
 - 文芸学科(2011年4月新設)
 - 美術史・文化財保存修復学科
 - 歴史遺産学科
 - 美術科[総合美術/日本画/洋画/版画/彫刻/工芸(漆芸・陶芸・金工)/テキスタイル]
- ◎デザイン工学部
 - 企画構想学科
 - プロダクトデザイン学科
 - 建築・環境デザイン学科
 - グラフィックデザイン学科
 - 映像学科
 - メディア・コンテンツデザイン学科
- ◎大学院芸術工学研究科
 - 博士後期課程 芸術工学専攻
 - 修士課程 [芸術文化専攻/デザイン工学専攻/デザイン工学専攻 仙台スクール]
- ◎研究機関
 - 総合研究センター/東北文化研究センター/文化財保存修復研究センター/こども芸術教育研究センター/デザイン哲学研究所/東アジア芸術文化研究所/社会芸術総合研究所

ACCESS



東北芸術工科大学広報誌 g*g

2010年10月15日発行
発行：学校法人東北芸術工科大学
〒990-9530 山形市上桜田3-4-5
東北芸術工科大学広報室
TEL:023-627-2246 FAX:023-627-2185
WEB:www.tuad.ac.jp
E-mail:hello-gg@aga.tuad.ac.jp
Design:FLOT
Printing:Tamiya Printing co.,Ltd.
©東北芸術工科大学 Printed in Japan 2010



TUAD IS HERE

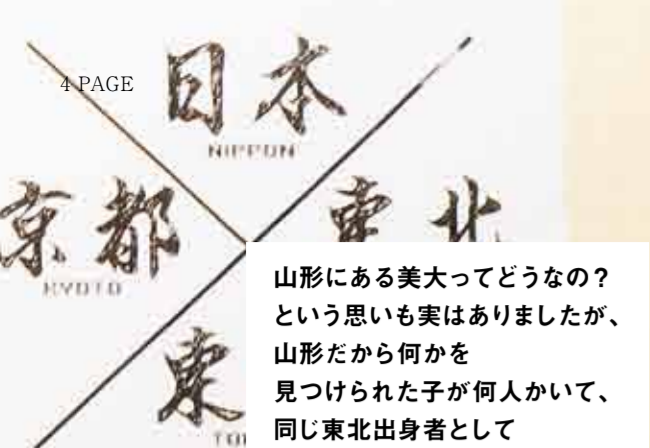
WEB

みなで「山形への入り口」を探す旅、
〈荒井良二の山形じゃあに。2010〉

一生一画、あいのて、モケモケ、やまがたオ
ルガン……心躍る言葉が並ぶ〈荒井良二の
山形じゃあに。〉が山形まなび館で10月31
日まで開催中です。この展示は、山形出身の
絵本作家、荒井良二さんの作品集「meta
めた」の原画展示を出発点に企画されたもの。
荒井さんの自由で奔放な感性と、ハードとし
てのまなび館が持つ魅力、企画に携わった
芸工大の卒業生など人々の熱意が融合し、
単なる展示会に留まらない多彩なアートイベ
ントとなりました。芸工大OBである小坂優
希さんが告知ツール全般を制作し、映像
作家の黄木優希さんが動画記録を担当して
います。

左から、阿部恵利子さん、後藤ノブさん、小坂優希
さん、黄木優希さん、新田太志さん、後野友美さん
小坂優希 0214-841-1111
株式会社アガ代表デザイナー・グラフィックデザ
イナー。2000年東北芸術工科大学卒業。2001年サ
ンデー・ブーンズ設立。2004年アオニチデザイン設立。
地方の「自然・暮らし・食物・技術」に付加価値を与
えるデザインに定評がある。

黄木優希 Oki Masaharu
2001年東北芸術工科大学情報デザイン学科映像コー
ス卒。8mm作品「まくもとまぎ」がロケタルダム国際
映画祭に出品されている。新進気鋭の映像作家。山形
国際ドキュメンタリー映画祭事務局勤務。



山形にある美大ってどうなの？
 という思いもありましたが、
 山形だから何かを
 見つけられた子が何人かいて、
 同じ東北出身者として
 素直にうれしかったです。
 前内道彦 [クリエイティブ・ディレクター]

心を掴まれた作品もあれば
 ゴウゴウってきたものもあり、
 いずれも私との間に
 コミュニケーションが
 生まれたという点では
 力のある人なんだと感じました。
 田中幸子 [Numero TOKYO 編集長]

アートも作家と観る人の
 コミュニケーション。
 自分の表現したいものを表現し、
 私の何かを刺激してくれる、
 野心や情熱のある作品に、
 これから感じられるね。
 内山光司 [(株)GT INC 取締役]

全体的に作品としての必然性が
 希薄に感じましたが、内向きな分、
 完成度は高いと感じました。
 若い世代が街の再生や
 社会的テーマに介入して
 いくことも重要ですね。
 片岡真実 [森美術館チーフキュレーター]

地方を盛り上げる活動は
 いいですね。こういう若者を
 ぜひ一度海外に出してみたい。
 美術家としては、質的に学生の
 域を超えてると感じた絵が
 3作品ありました。
 中山ダイスケ [アーティスト、本学教授]

PICK UP

NIPPON ARTNEXT 展 * 芸工大生

日本のアートネクストとして世界に羽ばたけ！ 次の舞台への挑戦権をかけた、エネルギッシュな合同展。

京都造形芸術大学と東北芸術工科大学が、去る9月23日から8日間にわたって、
 外苑キャンパスのこけら落としとして、日本のアートの次を考える〈NIPPON ARTNEXT 展〉を開催。
 卒業生・学生精鋭の出展作品約40点の中から、公開審査会によりアワードを決定しました。

〈NIPPON ARTNEXT 展〉も終盤を
 迎えた9月28日、椿昇氏+後藤繁雄
 氏をモデレーターとして「NIPPON
 ARTNEXT プライズ」の公開審査会が
 行われました。アート関係者のみならず、
 メディア関係者や著名人からなる審査
 チーム(田中杏子氏、箭内道彦氏、内
 山光司氏、片岡真実氏、中山ダイスケ
 教授)がアワードを選出。グランプリ受
 賞者には、上海のギャラリーでの個展開
 催のチャンスが与えられます。とはいっ

ても、上海デビューがお膳立てされたも
 のではなく、「サポートはあるものの、単
 身現地に乗り込んで人間関係を築き自
 らプロモーションをしてくる」……という
 “自分を試してこい”といった意味合いの
 賞。このアワードの趣旨等説明を受けた
 上で、5人の審査員は約1時間にわたっ
 て展示会場を回り、作品に点数を付け、
 審査員各自が個人賞を決定。審査員の
 合計点を参考に協議の上でグランプリ
 を決定する予定でしたが、壁一面の大

きな絵が審査員全員の高評価を得た本
 学大学院の近藤亜樹さんが、協議を待
 たずして満場一致でグランプリに輝きま
 した。また、情報デザイン学科(現・映
 像学科)卒業生の森田桃子さんの作品
 や、E&G 紙面ではお馴染みの「ひじお
 りの灯」「ミサワクラス」「じゃぼんデ
 ザイン事務所」といった地域を巻き込ん
 だプロジェクトも高い評価を受け、“東北
 勢強し”との印象を残したプライズとな
 りました。 **WEB**

グランプリを受賞した
 近藤亜樹さん(東北芸術工科大学大学院実験芸術領域)
 「受賞したこと以上に次に進めようということが嬉しいです
 ね。実際に目にしたものや出会った人からインスピレーシ
 ョンを受けて、一本の映画を作るような気持ちで描いてい
 ます。まだ見たことのない中国やアフリカでいるんことに
 触れて、日本に何をもち帰れるか、無意識の中で何を
 感じ取ってこれるか、私自身、すぐ見てみたいです。」



上: 本学「R コモンズ」の作品を興味深げに眺める審査員の箭内氏。中: 芸工大からは中山ダイスケ教授が審査員として参加しましたが、厳正な評価で作品を審査。下: 田中・内山両審査員からの質問に丁寧に答える本学研究生の森田さん(中央)。

芸工大OB * 教授

熱い三人の陶芸家が語りあった 芸工大の窯場の夜。

一人の作家として生きていきたい、
 という想いを胸に芸工大に入学した2人の学生。
 等身大でつき合える恩師との出会い。



遊んで学んだ芸工大での日々、
 先輩であり友人のようでもあった、佐々木先生の存在。

静穏で緑豊かな岡郷・福島県会津本郷で、陶芸工房「樹ノ音工房」を夫婦で営み陶芸家として活躍する佐藤大寿さんとサトウアカネさんのご夫婦は、共に芸工大一期の卒業生です。2人は美術科工芸コースでともに学び、毎日遅い時間まで制作に打ち込む日々を過ごしたといいます。サトウアカネさんは当時を振り返り、「一期生なので先輩も後輩もないですよ。誰に聞いていいかわからない不安もあり試行錯誤の連続でした。でもその分、決まり事も少



上: 工房の近くにある古い蔵を改装したカフェ「yuinoba」。左下: 柔らかな色調と優しいモチーフが描かれているサトウアカネさんの作品。右下: 佐藤大寿さんの作品は、深みのある青色が美しい青磁鉢。樹ノ音工房 WEB: <http://www.kinooto.com/>

サトウアカネ Sato Akane・佐藤大寿 Sato Daiju
 本学美術科工芸コース卒業後、陶芸家として独立(サトウアカネ)。大学院芸術工学研究科卒業後(佐藤大寿)、還元である父の家業を手伝い、2001年10月に独立、結婚。同年、会津本郷町内に「樹ノ音工房」をオープン。
 ●佐々木先生へひとこと
 先生との出会いがあって、今の私たち「樹ノ音工房」があります。これからも卒業生が陶芸家になれるカリキュラムを、先生の愛と優しさで実践してください。

「同士」として教え合い、裸の心でぶつかり合う 作家として、先生として、人として培った信頼関係。

佐藤さん夫婦が4年生の時に赴任して
 きたという佐々木講師。2人は、あら
 ゆる事を栄養にする力と、やる気とエ
 ネルギーに溢れた学生だったといいま
 す。当時は学内での取り決めも緩く、
 お酒が入った付き合いも頻繁だったと
 言います。佐々木講師は温かい視線で
 見守っていました。2人の活躍と繋がり
 は、これからも歴史を積み重ねていく
 芸工大に
 ともかけがえのない宝物です。

佐々木理一 Sasaki Riichi
 本学美術科工芸コース陶芸専任講師。1989年東京芸術大学大学院美術研究科陶芸専攻修了。修了制作サロン・ド・プランタン賞受賞。2002年益子国際陶芸展入選、FUJI国際陶芸ビエンナーレ入選等。他、個展・グループ展等多。
 ●2人へひとこと
 卒業生の代表として、後に続く学生にいい影響を与える生き方をしていますね。2人の頑張りに感謝。また協力し合える事があったら是非やろう。



2010年春に佐々木教授が制作した、抽象文様と風化する素材フォルムが形成する器。【黒線紋機器】

美術科 工芸コース

用の美という言葉に表される、美しさを備えた、日常の中のもの作りを学ぶ工芸コース。古くから日本人に馴染み深い「漆芸」、武器やジュエリーとして紀元前から人と関わってきた「金工」、土と対峙することで生み出されてきた「陶芸」という、3つの専門を軸に学びます。また専門素材に限定せず、幅広い創作活動に挑戦できるのも工芸コースの特長です。



プロダクトデザイン学科

玩具やスポーツ用品、雑貨、家具、家電、自動車などの製品、住宅や店舗などのインテリア、公共空間やディスプレイまで、私たちの暮らしに関わるあらゆるものの、美しさや機能、持続可能性などを含めたデザインを学びます。卒業生は企業のデザイナーとして活躍しているほか、中には有田焼の食器のデザインコンペでグランプリを受賞した方もいます。



INTERVIEW

OPEN GALLERY

生涯学習プログラム 公開レポート①



実際のかぼちゃを触って形のおもしろさを感じながら、水落ち和紙などで作品にアクセントをつけて魅力を引き出していき、立体かぼちゃの制作。単なる工作にならないように、五感を解放して制作していきます。

+art
人生に、アートを。

臨床美術士5級取得講座 ～美術で脳を活性化～(資格取得講座)

人生にアートをプラスし、豊かな人生づくりを応援する生涯学習プログラムは、様々な角度から芸術にアプローチする多彩な内容で構成されています。「臨床美術士」は、アートを社会に役立てることが可能な資格のひとつです。

臨床美術士とは、誰もが苦手意識を感じないように工夫されたアートカリキュラムを通して、参加者の感性を引き出し、生きる意欲の創出にまで繋げていく専門家。この得講座では、医療、介護、福祉をはじめ教育の場や能力開発に活用できる「臨床美術士」の基本的な知識や考え方を学び、基本画材となる「オイルパステル」を使ったカリキュラムを実践できる力が身につく内容となっています。全5回の講座のうち2回目となる今回は、古新聞紙と和紙を使って立体のかぼちゃを作ります。

かぼちゃの丸み、実がつまった重さ、ごつごつとした表皮を感じながら、古新聞紙を丸めてかぼちゃの中身から作り、外側には色とりどりの和紙を貼るという簡単なもの。講師の藤木先生は一人ひとりに声をかけ、視覚だけでなく五感を働かせて右脳を活性化させ、おもしろい表現を引き出せるように見て回っ

ていましたが、これも臨床美術士の実践例。思い思いの和紙を貼り創作に没頭していく受講者に対し「たまにはかぼちゃも見てくださいね」と笑いを誘いながら、高齢者、認知症、子どもに作業させた場合の注意点や工夫など、現場の指導者に必要な知識も伝えていました。

受講者は、「臨床美術士」になるために学ぶ手法や考え方を現在の職場で活かしたいという人や、美術を社会に役立てたいという意識を持っている人、子どもの感性を育てるのに役立てたいという人など様々です。「臨床美術士は、自己表現する喜びを伝えたい、という発想から始まっていて芸術的な分析はしません。誰が優れているかではなく、どう人と関わることが重要なんです」と藤木先生は語り、「臨床美術士」が美術に対してこれまでと違った視点を持って、社会や人に直接的な関わりを持つことを強調しました。



風合いある質感の和紙を裂き、揉み込んだり紐状にしたりして制作者の個性をつけていきます。



受講者のかぼちゃに対する感じ方や、見る角度によって、かぼちゃの表情はそれぞれ違います。



藤木晃宏【臨床美術士】

美術作品を見る立場ではなく、自ら創るという提案をしている藤木先生。「臨床美術士になるためには、楽しさを体験して感じる事が大切。作業工程を追うだけでなく、どうすればイメージが伝わるか、自分で体験できるカリキュラムになっています。美術に対する意識転換が図れます。」



立花淳子さん

仙台の児童館に勤務しているという立花さん。「今回の立体かぼちゃを作りたいと受講を決めました。子どもと関わる仕事をしているので、子どもの心に働きかける行動の参考にしようと思っていましたが、それ以上に自分の視野が広がったことが大きな収穫となったように思います。」

受講申込
受付中!



パッシブハウス・ジャパン認定
省エネ建築診断士養成講座
～山形エコハウスで学ぶ省エネ建築の最前線～

- 日程：2011年1/13(木)・14(金)
 - 時間：1/13 13:00-17:00、1/14 8:30-15:00
 - 講師：森みわ(本学客員教授)、松尾和也(共にパッシブハウス・ジャパン理事)
 - 会場：本学講義室・山形エコハウス ●定員＝100名(最少開講人数30名)
 - 受講資格：個人・法人を問わずどなたでも受講いただけます。
 - 受講料：一般24,000円(登録料4,000円を含む)
／賛助会員8,000円(一社につき3名まで適応。診断士登録料は無料)
 - 申込締切：12/21(火) ※受講案内を12/24(金)頃までお送りします。
- パッシブハウス・ジャパン <http://passivehouse-japan.jimdo.com/>

山形県と本学が共同で開発した世界最高水準の省エネ性能を備えた山形エコハウスを教材に、ドイツの省エネ住宅「パッシブハウス」について理解を深めます。パッシブハウス・ジャパンのカリキュラムに基づいた講習を2日間の集中型で行い、エネルギーの考え方や建物の熱損失、気密性能と通風など、効率良く省エネ性能と居住性を高める方法を学修。最終日の検定試験合格者には省エネ建築診断士の資格が認定されます。これからの時代を考えた建築設計や住環境に携わる方の受講をお勧めします。

